御嶽山の火山活動解説資料（令和８年 10 月）

気 象 庁 地 震 火 山 部
火山監視・警報センター

地獄谷火口 1) の一部の噴気孔では引き続き勢いよく噴気が出ており、地熱域の温度は高い状態が継続していますが、長期的には温度の低下傾向がみられます。
地震活動は低調に経過しており、火山活動によるとみられる特段の地殻変動は認められません。
地獄谷火口内では、突発的な火山灰等の噴出に注意が必要です。
地元自治体等が行う立入規制に従い、また、登山する際はヘルメットを持参するなどの安全対策をしてください。
噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図１－①、図２）

今期間、地獄谷火口からの噴煙の高さは 300ｍ以下で経過しました。

・地震や微動の発生状況（図１－②③、図３、図６）

今期間、剣ヶ峰山頂直下の火山性地震は、少ない状態で経過しました。震源は剣ヶ峰山頂直下の深さ－１km（海抜１km）付近に求まりました。

火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図１－④⑤、図４～６）

今期間、地殻変動観測では、火山活動によるとみられる特段の変化は認められません。

1）地獄谷火口とは、剣ヶ峰南西側斜面の想定火口域を示します。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年 11 月分）は令和８年 12 月８日に発表する予定です。
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html

この資料は気象庁のほか、中部地方整備局、国土地理院、東京大学、名古屋大学、京都大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、長野県及び岐阜県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『基盤地図情報』『電子地形図（タイル）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『数値地図 50ｍメッシュ（標高）』及び国土交通省発行の『国土数値情報』を使用しています。

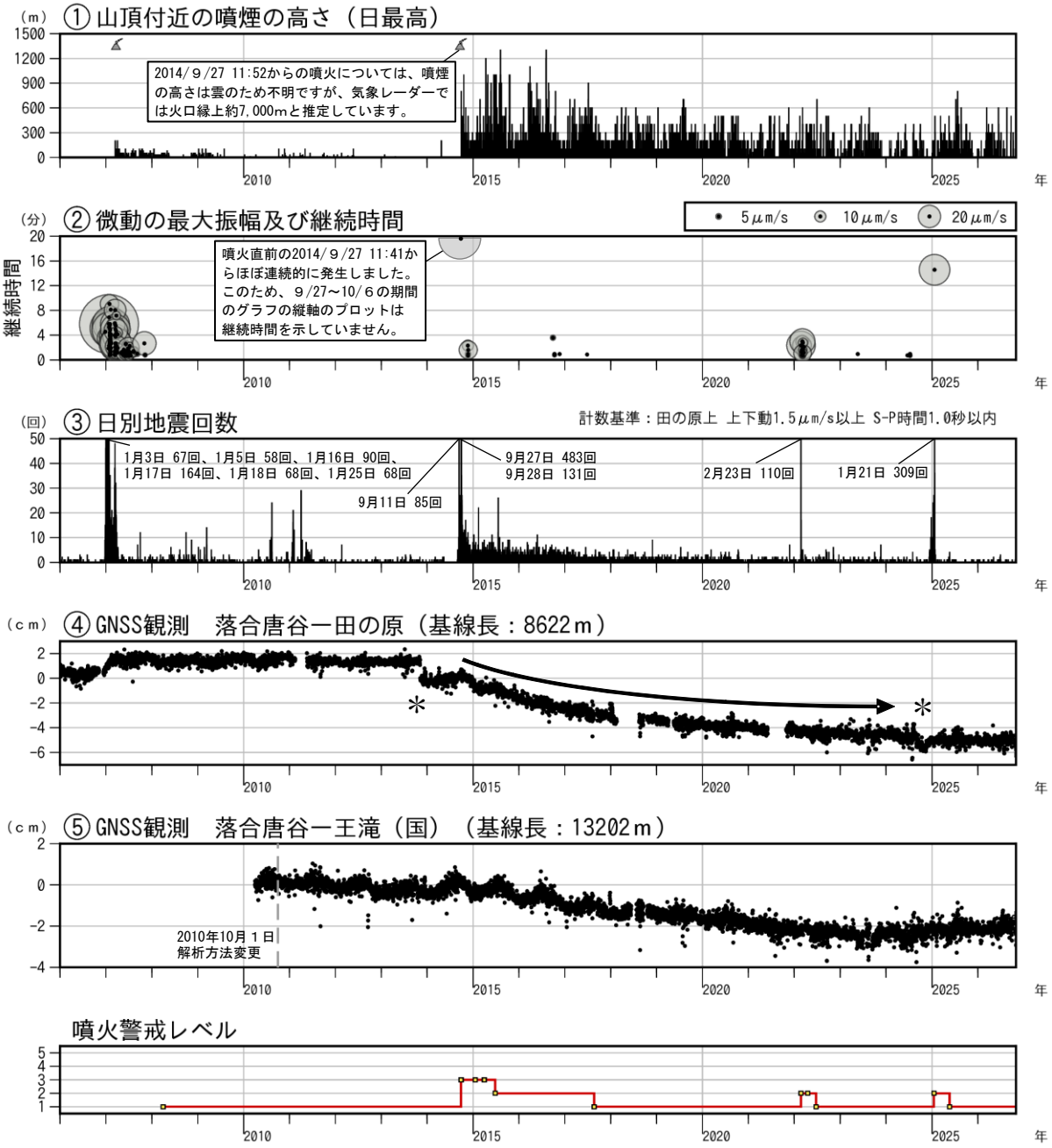


図１　御嶽山　長期間の火山活動経過図（2006 年１月１日～2026 年 10 月 31 日）
①灰色の三角シンボルは噴火発生を示します。2014 年９月 27 日 11 時 52 分からの噴火については、噴煙の高さは雲のため不明ですが、気象レーダーでは火口縁上約 7,000mと推定しています。
②の振幅は田の原上観測点の速度上下動成分です（火山性微動の発生した 2015 年７月 20 日、2016 年５月 19 日は欠測です）。
④～⑤は GNSS 連続観測による基線長変化です。　（国）：国土地理院
2010 年 10 月及び 2016 年１月に、解析方法を変更しています。空白部分は欠測を示します。
④ *印で示すステップ状の変化はシステム更新に伴うものです。
図中④～⑤に示す基線は、図５の GNSS 基線④～⑤のそれぞれに対応します。

・今期間、地獄谷火口からの噴煙の高さは 300m以下で経過しました。噴煙活動は長期的には緩やかな低下傾向となっています。
・長期的には GNSS 連続観測の一部の基線で、2014 年 10 月頃から 2024 年頃まで、山体の収縮によると考えられる縮みの傾向が続きました（例えば④矢印）。



図２　御嶽山　山頂部の噴煙の状況
上段：三岳黒沢監視カメラ　下段：中部地方整備局の滝越監視カメラ

・今期間、地獄谷火口からの噴煙の高さは 300ｍ以下で経過しました。

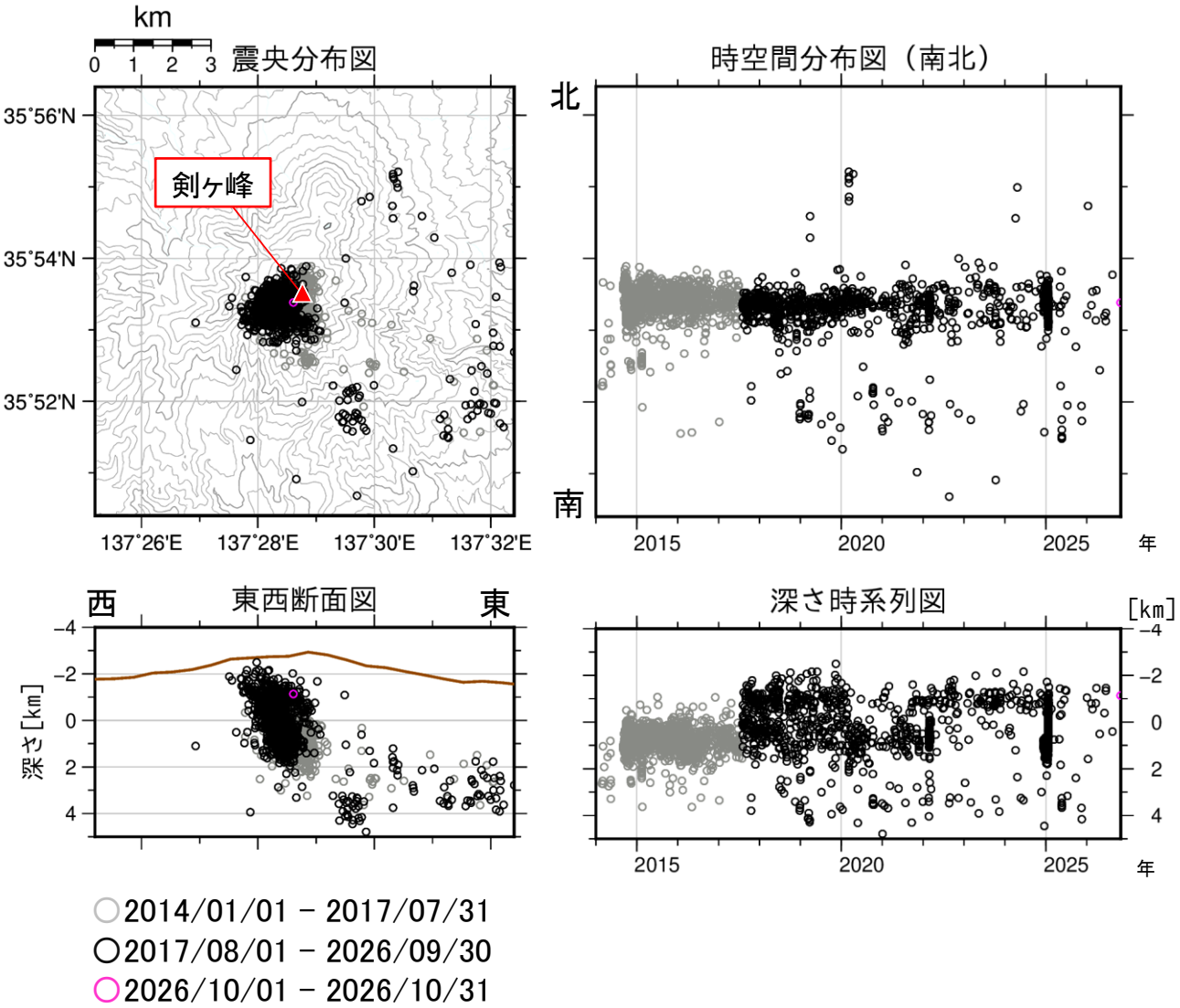


図３　御嶽山　震源分布図（2014 年１月１日～2026 年 10 月 31 日）
2017 年８月１日以降の震源分布は、震源計算に使用する観測点を新たに追加して再計算したものを示しています。
観測点の稼動状況により、求まる震源の数の減少や位置の精度低下が生じる場合があります。

・今期間、震源は剣ヶ峰山頂直下の深さ－１km 付近に求まりました。

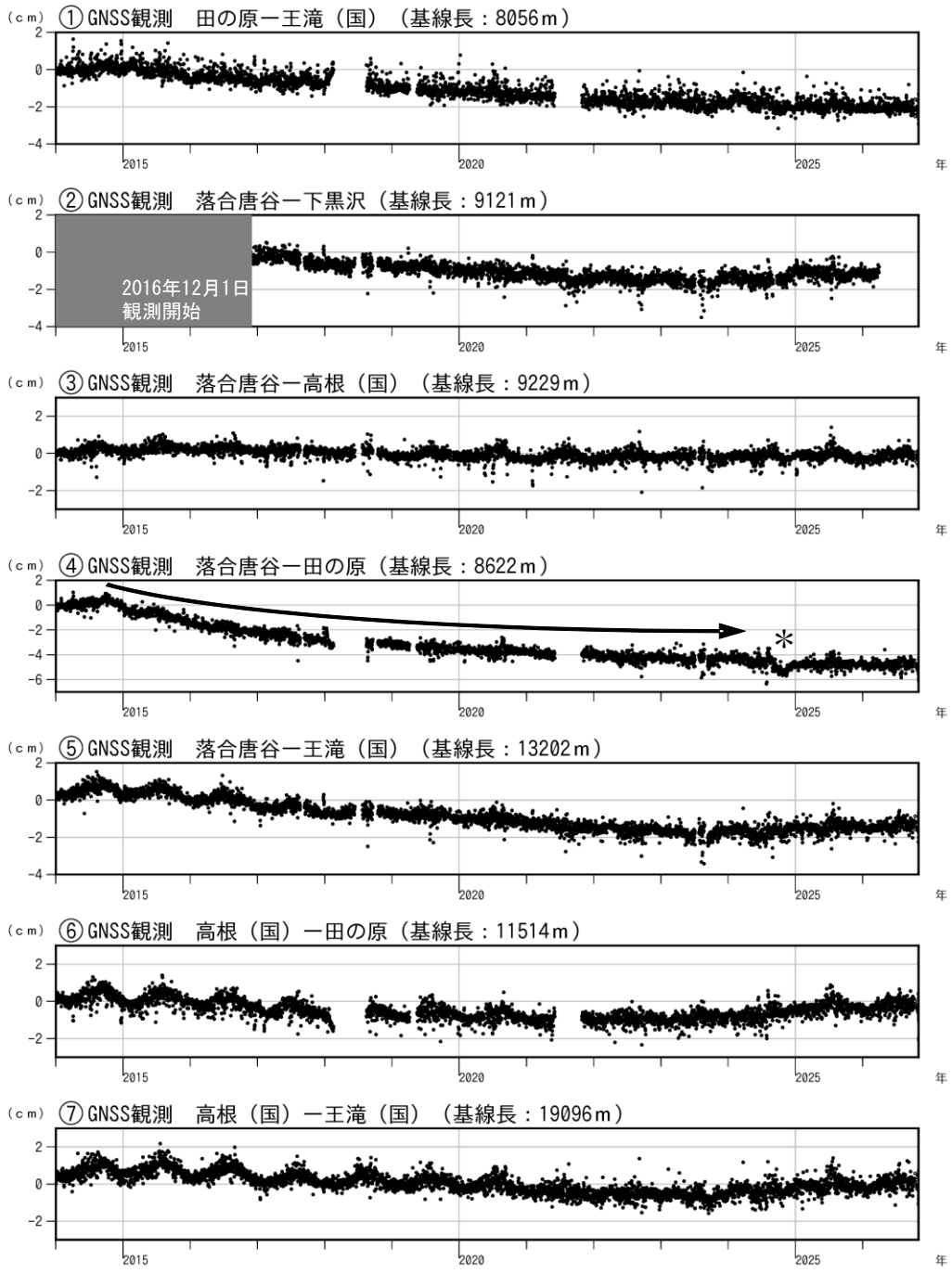


図４　御嶽山　GNSS 連続観測結果（2014 年１月１日～2026 年 10 月 31 日）
空白部分は欠測を示します。図中①～⑦に示す基線は、図５の GNSS 基線①～⑦のそれぞれに対応します。
基線④ *印で示すステップ状の変化はシステム更新に伴うものです。
基線②、⑤～⑦に見られている 2024 年頃の伸びの変化は、令和６年能登半島地震後の余効変動と考えられます。
（国）：国土地理院

・長期的には GNSS 連続観測の一部の基線で、2014 年 10 月頃から 2024 年頃まで、山体の収縮によると考えられる縮みの傾向が続きました（例えば④矢印）。

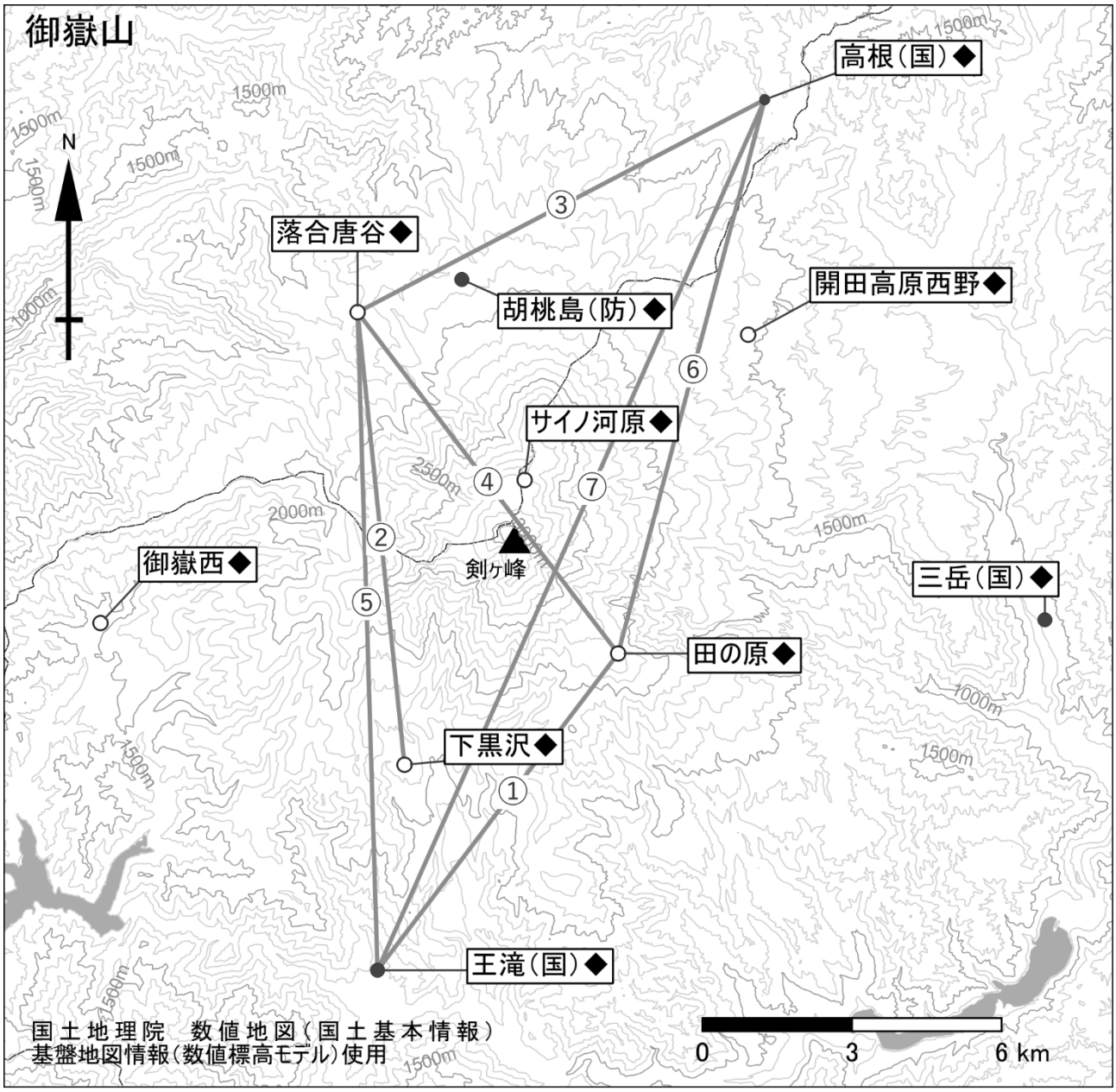


図５　御嶽山　GNSS 連続観測点と基線番号

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院　（防）：防災科学技術研究所

図中の GNSS 基線①～⑦は図１の④～⑤、図４の①～⑦にそれぞれ対応しています。

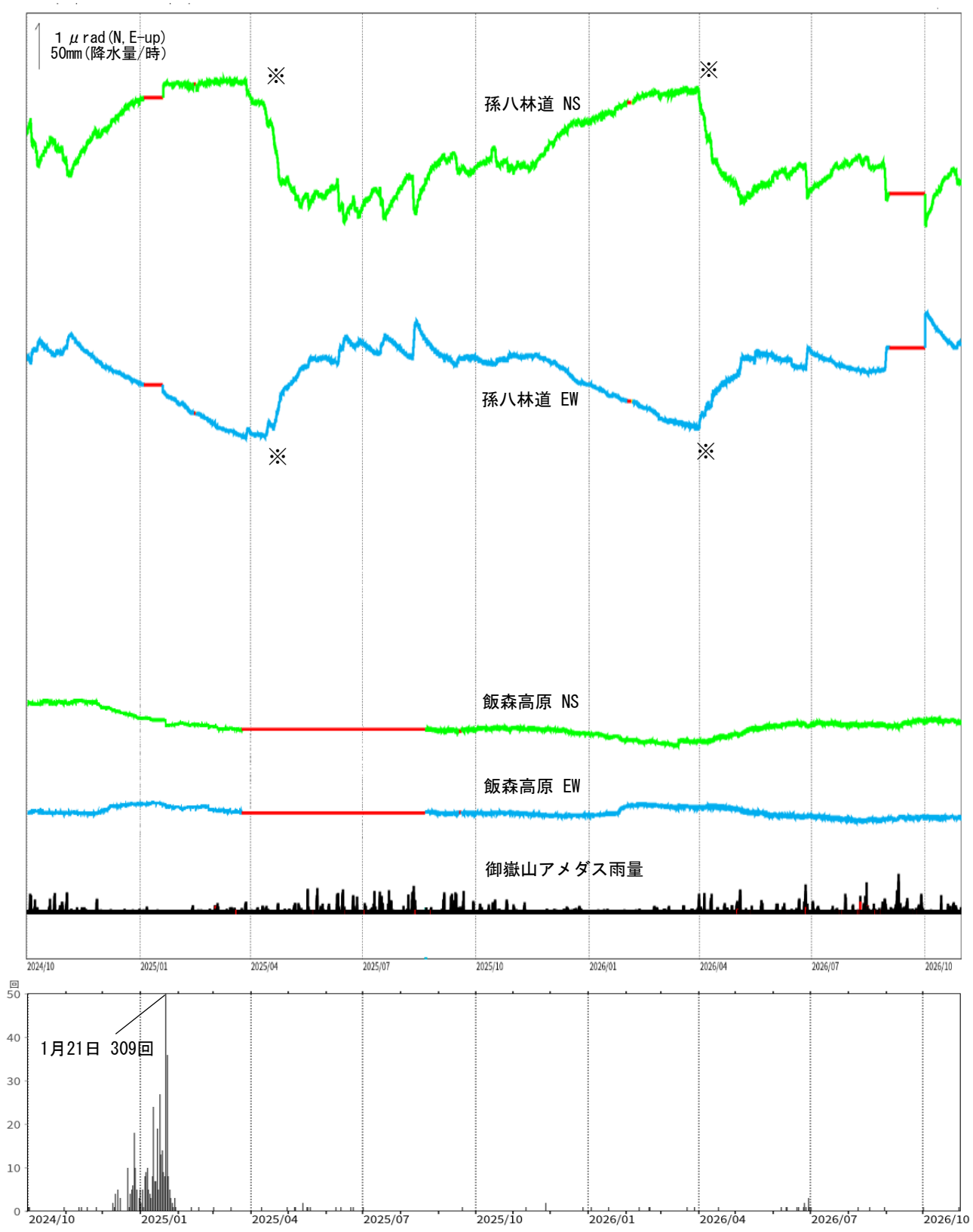
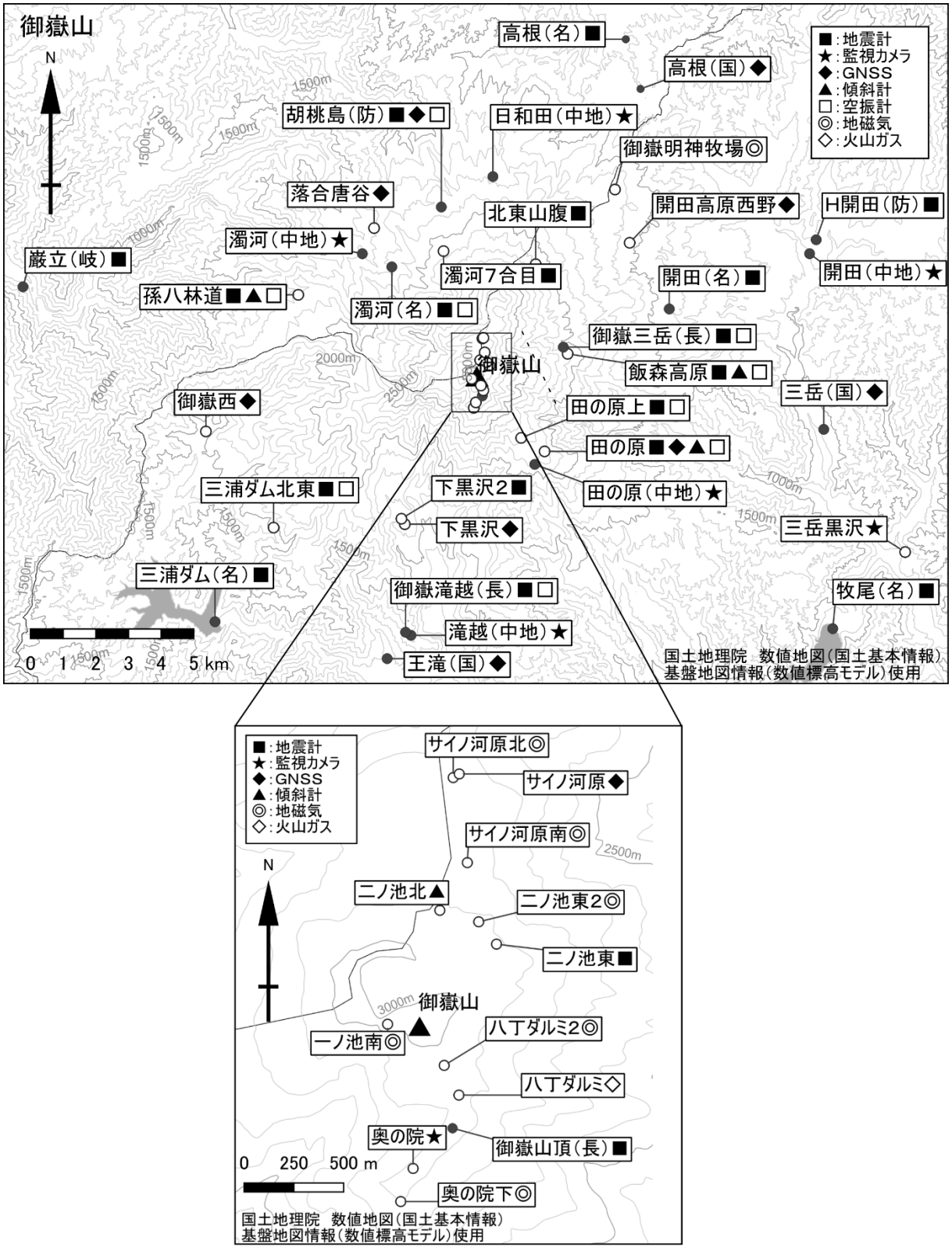


図６　御嶽山　傾斜変動と日別地震回数の推移（2024 年 10 月１日～2026 年 10 月 31 日）

データは時間平均値で、潮汐補正済みです。
赤線部分は欠測を示します。
※：季節的な変動とみられます。

・今期間、傾斜計による観測では、火山活動によるとみられる変動は認められません。



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（中地）：中部地方整備局、（防）：防災科学技術研究所、（名）：名古屋大学、
（長）：長野県、（岐）：岐阜県

図７　御嶽山　観測点配置図
今期間、「御嶽山頂（長）」観測点からのデータは入っていません。